

上古漢語の*r,*lについて

宮 本 徹

1.

本稿が検討を加えようとするのは、上古漢語中に介音または声母後置成分として再構される*r,*lについてである。これらの存在は“新派”⁽¹⁾と呼ばれる研究者達によって積極的に主張され、今日では、特にそのうちの*rについて言えば、殆ど定論の如く見なされている。これら*r,*lの設定は上古漢語中の、或いは上古・中古間の音韻変化についての様々な問題を多方面に亘って説明しうる非常に優れた着想であるが、なおそこには論ずべき問題が少なくないように感じられる。

そこで本稿では主として諧声系統を根拠としつつ、これらの問題について若干の私見を述べてみたい。*r,*lを同時に扱うのは、これらがその設定の段階において密接に関連付けられていることに加え、そこにはまた共通の問題点が存在すると考えるからである。

2.

現在の“新派”の学説によれば、上古漢語中に再構される音素/*r/は、大まかに言って、一つには中古の来母に対応する声母として、いま一つには中古二等韻を生み出す介音または声母後置成分として設定されている。この来母と二等韻の“特殊な関係”に最初に着目したのは Yakhontov (1960) のようである。同氏は、

(1) 中古二等韻は「冷魯打切⁽²⁾」などごく少数の例外を除き来母と結合することがない。

(2) ある諧声系列において来母字と非来母字が同時に出現する場合、①非

(2)

二等韻・来母字が二等韻・非来母字の声符となるか、あるいは②二等韻・非来母字が非二等韻・来母字の声符となる関係が存在する。例えば、

① 麥落蕭、力救切：膠古肴、古孝切、嚶古肴、許交切

鹿盧谷切：灑所宜、所菹、所綺切、灑所綺、所蟹、砂下、所寄切

② 東古隈切：闌落干切、練郎旬切

監古銜、格儼切：濫胡豔、盧噉切

の如き諧声系列がそうである。

(3) 非二等韻・来母字が二等韻・非来母字の異読をもつ。

ことを根拠に、上古において中古二等韻字は介音**-l*-を有し、**kl-*、**pl-*等の複声母を構成していたと結論付けた (pp.43-47)。この説は Karlgren 氏以来の懸案であった来母字と他声母字との通用現象を、声母のレベルのみで論じるのではなく、そこに介音も含めた点で非常に画期的である。

一方、李 (1971) は中古知組・莊組及び二等韻の発生を説明するものとして介音**-r-*を設定した。⁽³⁾ この説を提出した李氏の意図は、恐らくは上古音体系の簡略化と上中古間の音韻変化の説明にあって、そこには Yakhontov 氏のような二等介音と来母を結びつけて論じようという積極的な意志は認められない。来母の上古音価は李氏にあっては依然として**-l-*である。ただここで注意すべきは、李氏の**r*が介音であったと同時に羊母の上古音価でもあったという点である。なぜなら音素を基準にして言うと、Yakhontov 氏が/**-l-*についてそれが声母と介音の二つの役割を担うことを認めたのと同じことを、李氏は/**r-*についても認めたことになるからである。これによって中古で来母・羊母となる二つの音素は、上古音においてきわめて重要な地位を占めるに至った。

両氏の説は Schuessler (1974) によって統合される。同氏はシナ・チベット諸語における同源語の比較を主たる根拠として、来母と羊母の上古音価を入れ替えた (来母:**-r-*; 羊母:**-l-*)。⁽⁴⁾ その結果、Yakhontov 氏のいう二等介音**-l-*は李氏の**-r-*に吸収され、また逆に、これによって李氏の**-r-*は、二等韻と来母の“特殊な関係”を説明する根拠を得た。

“新派”の主張する*r, *lの役割は非常に多岐に亘るが、その設定の段階における基本的な論点はおおよそ以上のようなものである。では次に、これらを踏まえた上で、そこに存在する問題点について検討を加えてみたい。

3.

rの取り扱いには研究者によって若干異なるが、基本的には①中古二等韻は上古では-r- (Yakhontov氏の*-l-)を有し、②*Cr-型(または*Cl-型)複声母によって来母字と他声母字の通用現象を説明する、という点では一致している。その具体例をいま鄭張(1991)及び同(1999)によって以下に示す。

清C一等「各」*k_lag 同二等「格」*krag

濁C一等「貉」*glag 同二等「恪」*grag 来母「洛」*rag < **hgrag
一等韻に*-l-が配当されるのは、鄭張氏における*r, *lの分布条件の制限による。即ち鄭張(1999)によれば、それは

r (中古でɣに変化) : 二等、三等重紐B類韻及び庚三蒸幽韻唇牙喉音⁽⁵⁾

l (中古で消失) : 一四等、三等重紐A類韻及び一般三等韻

となる。⁽⁶⁾

いまひとまず*rについて考えると、鄭張(1999)に「前者(二等韻及び三等重紐B類韻等——引用者注)有r是必然的、這是二等・重紐B形成的条件」(p. 9)と述べられる如く、中古二等韻及び重紐B類韻(庚三蒸幽韻唇牙喉音を含む。以下同)が上古で声母後置成分⁽⁷⁾*rを有することはその体系上必須の要件であって、その個々の文字の諧声系列における来母字の有無は問われない。⁽⁸⁾しかしながら一方で、その体系では後置成分*rは来母字と他声母字との通用現象を説明する根拠としても用いられていた。つまり彼の*r(*lも同様に)は既に抽象的な記号としてではなく、来母字と通用関係が存在することを前提したある音声的実体として設定されている。ではそのように設定された*rは上古漢語における諸現象、とりわけ諧声系統を過不足なく反映しているといえるだろうか。

いまそれを重紐B類韻について検討してみる。鄭張(1984)は重紐B類韻

(4)

が来母字と通用する証拠として様々な例を挙げるが、その中でも最も主要なものは当然諧声現象であると考えられる。いま同氏がその例として掲げるものを列挙すると以下のようになる (p. 45)。

禁、从林声；泣、从立声；京、作涼声；品、作臨声；變、从巛声

これらは確かに同氏の説を裏付ける、即ち来母字と重紐 B 類韻との密接な関係を示す証拠となりうる例であるが、では来母字が（重紐が存在する）唇牙喉音声母字と通用する場合、必ずや重紐 B 類韻とのみ密接な関係を有するかというと、それは必ずしもそうとはいえない。

いま来母字が唇牙喉音声母字と通用し、且つそこに三等韻字が現れる諧声系列を、沈（1945）によって以下に示す。⁽⁹⁾

(1) 牙喉音声首

○菴鍾C見/群	：鑿冬来
●京庚B開見	：涼陽C開来…
●今侵B見	：儉覃来
(Δ) 兼添見、嶮塩B溪、嶮塩B疑、 謙嚴C疑	：廉塩AB来…
○久尤C見	：吹尤C来*
○究尤C見	：坑尤C来
葛寒見	：鴉塩AB来 ⁽¹⁰⁾
○谷東一見/東C羊	：谷東一来*
(0) 各唐開見、咎豪見/尤C群	：略陽C開来…
○咎豪見/尤C群、欲宵B並…、 胎尤C曉	：絳尤C来
○曷陽C開書/曉	：量陽C開来；糧陽C開来
●翕侵B曉	：擲覃来
(0) 夾咸見、狹塩B曉	：狹塩AB来
●困真B合溪	：裀諄AB来
監銜見	：熅塩AB来*

- 京庚B開溪 : 蜺陽C開來
- 魚魚C疑 : 魯模來
- 樂肴疑/江疑/唐開來 : 擲陽C開來*
- 少寒開疑、勁真B開疑 : 窈仙AB開來/真B開疑；列仙AB開來
- (0) 豕桓透/支AB開昌、喙麌C曉…⁽¹¹⁾ : 蠶支AB開來*
- △夔陽C合影/庚B合影/耕合匣、 : 穫耕合來
- 護庚B合影、護陽C合影…、
- 夔陽C合匣、曉陽C合曉
- 兇鍾C曉、說鍾C曉 : 峴東一來
- 整之C曉 : 釐之C來
- (△) 庀模曉、虛支B開曉、 : 慮魚C來
- 虛魚C曉/溪、慮魚C疑、慮元C開疑
- 牟江匣 : 牟東C來；隆東C來…
- (0) 苽添匣、脅嚴C曉… : 荔支AB開來…
- 位脂B合匣 : 莅脂AB開來…
- (2) 來母声首
- 龍鍾C來 : 龔鍾C見…
- 婁虞C來 : 屢虞C見、婁虞C群
- 來咍來 : 欸真B開疑…；鰲真AB開來
- 侖諄AB來 : 鎰文C幫
- △緜桓來 : 變元C合見/滂、變仙B幫
- △麥蕭來 : 膠幽A見、璆幽A群…、
- 璆尤C群、鷗尤C明…、
- 繆幽B明…、繆東C明
- 林侵AB來 : 禁侵B見；襟侵B見…、
- 襟侵B群…、襟侵B疑、
- 顛侵B匣
- 里之C來 : 萁東C曉

(6)

- | | |
|--------|------------------------|
| ○呂魚C来 | : 苔魚C見… |
| ○鹿東一來 | : 顛鍾C曉… |
| ○宐東C来 | : 齋東C明* (12) |
| ●立侵AB来 | : 泣侵B溪、菴侵B群…、
列侵B疑* |

(3) 唇音声首

- | | |
|----------------------------|--------------------------------|
| ●稟侵B幫、凜侵B群 | : 燻覃来…、懷侵AB来母…* |
| ○匕脂A幫 | : (尼脂AB開娘、麓(菴)支A明;)
柅脂AB開来 |
| ●品侵B滂、碧侵B疑 | : 臨侵AB来 |
| ○風東C幫、楓東C幫…、
楓東C並…、飄凡C並 | : 嵐覃来… |
| 彪江明 | : 塗鍾C来 |
| 卯肴明 | : 颯尤C来… |
| ○文文C明、旻真B明…、
汶文C明、虔仙B開群 | : 吝真AB開来 |
| ○亡陽C明 | : 良陽C開来 |
| ○萬元C明 | : 蟻祭AB開来 |

以上の如くである。各行左端の記号は、「●」は鄭張氏の主張する来母字とB類韻の密接な関係を示す例と見なせるもの、「○」はその反例となる、即ちA類韻及びC類韻との関係を示す例、「△」はB類韻とA・C類韻の両方が現れ一方に帰属されることができない例、そして判断の材料とならないものには記号は付さなかった。(13) () を付した記号は、声首からは判断できないものの、他の諧声字の振る舞いから見てどちらかに分類したことを表す。

「○」については少しく説明を要する。上ではC類韻をA類韻と同列に扱ったわけであるが、それには以下のような理由がある。即ち、“新派”の*rは中古音における軽唇音化の問題とも関連付けて設定されているのだが、この軽唇音化という観点を持ち込んだ場合、もしも上古音に音素/*r/の有無による

三等韻の対立を考えるとすると、C 類韻は A 類韻の側に立てることが妥当であると考えられる。平山 (1967) によると、軽唇音化の音声学的理由は奥舌主母音と声母の口蓋化に求められるが、そこでは音韻的には C 類韻を A 類韻の側に立て、C 類韻唇音声母字が A 類韻のそれと同じく声母に口蓋化要素 /j/ をもつ可能性が指摘されている。⁽¹⁴⁾ 音素 /*r/ は声母の巻舌化と韻母の centralization をその主要な働きとする介音であるから (李 (1971) p. 23)、明らかに口蓋化とは逆行する働きを有する。C 類韻を A 類韻と同列に扱うのには、以上のような理由がある。

このようにして上表を眺めてみると、諧声関係について見た場合、来母字は必ずしも重紐 B 類韻とのみ関係が深いとは言えないことがわかるであろう。各韻類はその母体数が異なるから出現数の比較は単純には意味を持たないが、いま試みにそれを挙げてみると、⁽¹⁵⁾ ● は全 48 例中 13 例 (27.1%)、○ は 24 例 (50%。うち A 類韻声母 1 例)、△ は 5 例 (10.4%)、その他 6 例である。もしも鄭張氏ら“新派”の主張する如く、中古重紐 B 類韻が上古で *r を有し、かつそれが音素として上古来母と共通の要素であるならば、そこにはもっと両者の密接な関係が現れてもおかしくない。しかしながら来母字は C 類韻との関係も密接であり、重紐 A 類韻との関係も絶無とは言えない。⁽¹⁶⁾ 来母字はあくまで少なくとも B 類韻と C 類韻の対立に関しては中立的と見なすのが妥当であろう。

実は C 類韻を A 類韻の側に立てるとするのは、結論としては鄭張氏と同じである。⁽¹⁷⁾ 既に上で見たように、同氏の「一般三等韻」(ここでいう C 類韻) は重紐 A 類韻と同じく *l を持ちうるものとして設定されている。この *l は来母または羊母との通用現象が存在する場合に、必要に応じて再構されるものであるが、果たして、上古羊母に相当する音素をたてることによって来母字との通用現象を説明することが妥当であるかどうかは疑問が残る。確かに鄭張氏は羊母と来母が密接な関係にあることを強調するのだが、⁽¹⁸⁾ 次章に掲げた羊母字をめぐる諧声現象を見てもわかるように、来母と羊母がとりたてて密接な関係にあるとは考えられない。少なくとも両者が上古においてある種

(8)

の「代替」を可能にするほど近い音であったとは考えられない。また彼らにおいて*1は羊母の上古音価であり、後述するように羊母字と通用関係を持つ諸声母は*C1-と再構されるが、もし仮にそうだとするならば、ここで来母字との通用関係を根拠に*1を立てられたC類韻(あるいはA類韻)は羊母と多く通用関係を有することが期待される。しかしながら結果はむしろ逆であって、これらの内で羊母字と通用関係を有するものはわずかに上表右端に「※」を付したものであつて(『説文』未収字も含む)、その中でも*1を立てられたC類韻で比較的まとまった数の羊母字をもつものはわずかに象声字に限られる。

筆者は上で示した鄭張氏の主張する三等韻の分類そのものには異を差し挟むものではない。つまりB類韻(及び庚三蒸幽韻唇牙喉音)とA・C類韻の間に、上古において何らかの音韻的差異が存在したという主張には、中古の軽唇音化との関連からも大いに賛成である。しかしながら、鄭張氏らが唱える如く、それらの実質を音素/*r/, /*1/の配当の違いに帰すという主張には、上述のように諸声系統の説明という点から疑問を抱かざるを得ない。これらの間に存在した音韻論的対立は/*r/対/*1/ではなく、別のものであったと考えたい。これについては下文にて再び論じる。

4.

では次に*rと密接に関連し、上でも少しく触れた*1の問題について検討したい。

李(1971)において複数設定されていた中古羊母の来源*r-, *grj- (及び*brj-)は、“新派”に至って唯一の*1-に合併され、⁽¹⁹⁾ それに伴い各声母との通用は代わって相手方に*C1-を設定することによって説明されるようになった。つまりこれまで羊母の側で条件付けられていた各声母との通用が、相手方の声母(即ち*C1-のC)によって条件付けられるようになったのである。

しかし仮に“新派”の再構音に従ったとすると、上古羊母にはただ一つの再構音が与えられるのであるから、それを内に含む諸声系列は、例えば中古

(10)

用(甬通涌)、易(賜) / 兪(廡竊榆渝)、秀、象、舍(余途涂茶除斜敘)

[来母+I] / 老(羸羸羸)、直(稟醬)

[来母+精組+III] 酉(酒醜劉留榴雷) / 六(六畜龜圭賣陸濱)

[精組+III] / 束(帝柴刺責策商積適)、

[幫組+III] 弋(貸代式必鳶盜宓瑟盜密) / 勺(包匍魚抱匏)

[(B) 牙喉音声母字との交替を示すもの]

[IV] し(氏)、衍、焱、斂(嗽)、役 / 久(羨)、ㄣ(彘)、頃(穎)、只(俛)、雀

[II+IV] 匠、與(舉旗)、勻(均鈞旬)、羊(羌養恙恙)、異(冀翼) / 公(衮松翁)、谷(容欲)、牙(芽邪)、巳(配)、熒(螢瑩營榮榮榮)、口(冑韋負綸圍衛)

[II+III+IV] 隶(逮眾肆鯨逯裏壞)、厂(厄虜延曳系匪獻緜奚溪) / 内(納尙納芮芮裔裔裔)、占(沾沾沾沾)、甚(歎勘)、世(貫葉牒渫)、咸(緘感減箴鹹覃譚潭)

[III+IV] / 臾(貫匱積隕遺)、刀(召到昭沼邵邵照羔)、多(宜袤麥侈移)、它(陀)、壬(迳聽廷呈勁輕靈或聖戩)、大(太牽盍笑達蓋艶)、益、炎(淡刻欬)

[来母+IV] / 束(闌蘭)、樂(藥)

[来母+II+IV] / 立(昱翌拉)

[来母+III+IV] / 示(柰隸)、象(篆綠蠹)

[来母+II+III+IV] / 召(峒沓閻監鹽濫覽)、折

[来母+精組+IV] / 一(聿守筆妻律號盡)

[精組+IV] / 酋(猶)

[精組+III+IV] 以(台能异允矣怠治臬叟沅俊酸險) / 自(泉泉替息習)、隹(推魁隹崔隹誰維唯淮季匯)、矢(疑知雉彘醫毆翳)、乙(札失扈日)

[幫組+II+IV] / 八(→冑穴屑)

[幫組+III+IV] / 粵

[幫組+来母+Ⅲ+Ⅳ] / 勺 (鈞芍杓約灼灼貌)

[影母] / 𠄎

以上に示した羊母字をめぐる諧声現象を如何に解釈するかは、実はそう簡単な問題ではない。というのも、舌音声母字との交替（即ち〔Ⅲ〕）は〔A〕群のみならず〔B〕群の諧声系列にも少なからず混じているからである。もしも〔B〕群に舌音声母字が混じていないか、あるいはそれがごく少数であるとするれば、我々は確信をもって羊母字をめぐる諧声現象を牙喉音系対非牙喉音系（実際には舌音系）に二分することができよう。だが現実にはそうはなっておらず、純粹に牙喉音声母字とのみ交替する諧声系列は少数にとどまる。しかしそれでもなお、いまこれらを牙喉音声母字との交替を示すか否かによって二分するのは、それによって上古羊母の音価を合理的に再構しうると考えるからである。

まずその手がかりとして、羊母字をその中に含む諧声系統については二つの重要な現象が観察される。それは第一に、〔A〕群と〔B〕群とを問わず、それが舌音声母字、即ち中古端・知・章組字に亘る場合、そこに現れるのは大部分が透・定母、徹・澄母及び書・船母の各声母字であるということである。隶声・尸声・世声・覃声⁽²³⁾・叟声・它声・壬声・益声・樂声・彖声・召声が全くこれに当てはまる。第二に、牙喉音声母字が現れる諧声系列（即ち〔B〕群）では、そこに出現する牙喉音声母に何らかの傾向は認められず、あらゆる牙喉音声母字が出現するということである。

以上のことから筆者は上古羊母の音価を次のように推定する。まず牙喉音声母字と交替する羊母の起源としては、やはり同じ牙喉音系の音を再構せざるをえない。なぜならこれによってしか第二点は説明し得ないからである。一方、第一点に挙げた諸声母は、送気性と摩擦性をその特徴としていると見なすことができる。⁽²⁴⁾ 筆者は牙喉音でありなおかつ第一の条件を満たすものとして/*ŋ(j)-/がもっとも適当ではないかと考える。⁽²⁵⁾ その理由としては、[ŋ]の送気性・濁摩擦性が上掲諸声母字との通用を生み出したとの説明が可能であろうし、また一般に/*ŋ-/（または/*ɣ-/）と再構される上古匣母の諧声

(12)

範囲が牙喉音全般に亘っているからでもある。また舌音声母字と交替する羊母の起源としては/*j-/を考えたい。これは中古羊母と同じである。上掲諸声母字との通用は、/*j-/が音声的には摩擦性の強い [j] であったために生じたと見なす。以上を要すると、羊母字の上古音価としては牙喉音声母字との通用関係の有無を条件に、/*h(j) -/と/*j-/の二つがあったことになる。⁽²⁶⁾

更に三等唇牙喉音声母字との関係でいえば、羊母字にはどのような特徴があるであろうか。上述の来母字の例に倣い、羊母字が唇牙喉音声母字と通用し、且つそこに三等韻字が現れる諸声系列を、沈(1945)に拠って以下に示す。

ㄅ支AB開羊	: 祇支A開群…
衍仙AB開羊	: 愆仙B開溪
敷陽C開羊	: 邀宵A影
役清AB合羊	: 督清A合曉
久尤C見	: 狽(狽) 脂B開見、軌脂B合見…、愆尤C溪、 亢脂B合群…、仇尤C群…、姜尤C羊
ㄅ祭B開見	: 彘脂AB開羊
頃清A合溪	: 穎清AB合羊…
只支AB開章	: 枳支A開見、𠵼支AB開羊
匠之C羊	: 姬之C見…
與魚C羊	: 舉魚C見
勻諄AB羊	: 洵真B合見、均諄A見…、均真A合見…、 趨清A合群…、詢真B(?)合匣
羊陽C開羊	: 姜陽C開見、羌陽C開溪…
異之C羊	: 冀脂B開見…
巳之C邪/羊	: 起之C溪、熙之C曉…
熒青合匣	: 榮清A合溪、螢清A合群、榮清A合影…、 營庚B合影、榮庚B合匣…
ㄅ微C合匣	: 育文C匣/仙B合匣/先合影、娟仙A合影…、 娟仙B合影…、絹仙A合見…、娟仙A合群、

- 捐仙AB合羊、弭仙A合曉
- 隶脂AB開羊 : 隸之C群、隸脂B開曉
- 占塩AB章 : 鈞塩B群、佔侵AB羊、玷塩AB羊
- 夷脂B合群 : 貴微C合見…、嘖脂B合溪…、禡微C合溪、
遺脂AB合羊…
- 多歌端 : 宜支B開疑…、黠脂A開影、移支AB開羊…、
終脂AB開羊
- 它歌透 : 蛇支AB開羊…、蛇麻AB羊、罷戈C溪、
訖支A開曉
- 壬青開透 : 頸清A開見…、輕清A開溪、頸清A開群…、
脛清A開曉、郢清AB開羊…、莖庚B開群
- 盍談匣 : 豔塩AB羊、鎰塩B匣
- 益清A開影 : 縊支A開影…、溢真AB開羊…
- 炎塩B匣 : 熊東C匣、鷓塩AB羊…、欵文C曉…
- 示支A開群/船 : 祗脂A開群、⁽²⁷⁾ 狝仙B合群/脂B開疑、示之C羊
- 象桓透/支AB開昌 : 蜂仙AB合羊…、喙廢C曉…
- 折齊開定/仙AB開章/常 : 鑿祭AB開羊、析祭AB合羊…、婁仙B開曉…
- 箇尤C從 : 猶尤C見、猷尤C羊…
- 以之C羊 : 允諄AB羊、矣之C匣
- 習侵AB邪 : 熠侵AB羊、熠侵B匣…
- 佳脂AB合章 : 隼脂B合群、惟脂AB合羊…、蜚尤C羊、帷脂B合匣、
睢支A合曉、隹脂A合曉…、季脂A合見
- 夬脂AB開書 : 疑之C疑…、隸脂AB開羊、凝蒸C疑…、
癥之C影、賢支AB合羊
- 乙真B開影 : 虬之C影…、航真B開疑、曰元C合匣、
伏真AB開羊…
- 侷欣C曉 : 侷真AB開羊…、肸真B開曉/欣C曉、肸諄A見、
鳩諄AB羊、抗真B合匣/文C匣

(14)

𠄎青傍	: 聘清A傍…、棹清AB開羊
勺陽C開章	: 杓宵A幫/傍、約宵A影/陽C開影、衞陽C開羊…
立侵AB來	: 泣侵B溪、菰侵B群…、殳侵B疑、昱東C羊、 翊蒸C羊…

一見して明らかなように、その通用範囲は来母字の場合とは非常に対照的である。即ち、来母字が重紐韻に関して中立的な様相を見せたのに対し、羊母字は依然としてC類韻との親近性を保持する一方、A類韻とも非常に密接な関係にあることが分かる。したがってもし中古における重紐の区別を何らかの形で上古にも遡らせようとするならば、いま我々が考えようとしている羊母の上古音価は、必ずやA類韻（及びC類韻）と共通の特徴を持たせなければならない。そして中古重紐の上古での姿については、中古に至るまでの口蓋性対非口蓋性という対立の形成を主母音の相違によっては全面的に説明できない以上、⁽²⁸⁾やはり依然として上古においても声母若しくは介音に口蓋性対非口蓋性という対立を認めざるを得ないのではないか。してみると上古羊母に要求されるのは、A類韻のそれと同じく口蓋性ということになる。この点においても“新派”の* l は十分な説得力を持たない。* l は* r の非口蓋性に対して相対的に非口蓋性が弱いとはいえるが、音素/* l /自身は何ら積極的な口蓋性を有するものではないからである。

いま述べてきた羊母がB類韻の側ではなくA・C類韻の側に立つという見方は、一見すると鄭張氏の主張を補強しているかに見える。なぜならここで羊母との親近性を認めたのは、他ならぬ同氏が* l の分布範囲とするA・C類韻だからである。しかしながらここで特に指摘しておきたいのは、同氏における* r 、* l の取り扱いそのものが妥当性を欠くという点である。

鄭張氏において中古重紐の対立は、ひとえに後置成分* r の有無によって生み出されるものとされており、一方の* l は重紐の対立からは自由な存在であって、少なくともその形成においては積極的な役割を果たすものではなかったかに見える。なぜなら上述したように、同氏の* l は、A・C類韻において来・羊母字との通用現象が存在する場合にのみ再構されるものだからである。こ

の点は/*l/自身には何ら積極的な口蓋性が備わらないことから確認できよう。しかし上文で明らかにした如く、来母が B 類韻対 C 類韻（及び A 類韻）の対立について中立的であったのに対し、羊母は A 類韻及び C 類韻との親近性を示していた。このことは*r を重紐 B 類韻の形成に対する必須の条件、逆に*l を A・C 類韻に対する任意の条件とする鄭張氏の取り扱いそのものが不適当であることを物語っている。もしも必須・任意ということを行うならば、*lこそが A・C 類韻に対する必須の条件であり、逆に*r は B 類韻に対する任意でなければならないのである。この点でも鄭張氏*r、*lの取扱いは大いに問題と言えよう。

5.

さて、以上述べてきたのは“新派”の主張する*r, *l に対する疑問のみであって、それに何らかの対案を示したわけではなく、またここに至って提示しうる何かを持ち合わせているわけでもない。ただここで一つ触れておきたいのは有坂（1940）に述べられた「口蓋的な \dot{i} と非口蓋的な \dot{i} 」による上古音韻体系再構の可能性である。

有坂氏は耕部と陽部（及び佳部入声と魚部入声）において、「口蓋的な \dot{i} と非口蓋的な \dot{i} 」が中古清・庚・陽韻等を形成した実例を示し、併せて中古精組と莊組の形成も同じくこの二種の拗介音によって説明できると説いた。氏が言及されたのはわずかこれら数韻に過ぎないのだが、ここには*r に依存することなく体系全体を再構する方向性が示されている。またその際、問題となるのは中古一等韻（または四等韻）と二等韻の分化であろうが、それももしこの「口蓋的な \dot{i} と非口蓋的な \dot{i} 」を三根谷（1953）のように声母の口蓋化対非口蓋化の対立に帰すならば、その説明は可能であると考えられる。⁽²⁹⁾

*r, *l を用いることなく上古音を再構することもまた可能であると言わなければならない。

注

- (1) 私見では、上古音研究史はおおよそ三つの段階を経て現在に至っている。その第一は清朝末までの古韻分部の時代、第二は中古音との対応を中心として音価推定を行った時代、第三はシナ・チベット諸語との対応をも視野に入れて音価推定を行い、上古音研究をシナ・チベット祖語再構への一段階と位置付ける時代である。

本稿で筆者が“新派”と呼ぶのは第三期、即ち 1960 年代半ば頃から上述のような立場を強力に推し進めた研究者たちのことであって、具体的には N. C. Bodman、W. H. Baxter、鄭張尚芳、楊劍橋、潘悟云等の名が挙げられよう。彼らがある種の“一体感”を有していることは、例えば鄭張氏が、本稿でも後に言及する来母と羊母の上古音価の交換について、「這（音価交換を指す——引用者注）目前在起諸家已成共識。」（鄭張（1998）p.16）と述べていることからわかる。

本稿ではこれら“新派”の研究者のうち、鄭張氏の論述を基に議論を進める。

- (2) 『広韻』による。以下同。
- (3) 後に李（1976）は知組・莊組に加え、牙喉音起源の中古章組の成立も介音*_r（j）- によって説明した。なお藤堂（1957）は中古知組・莊組の成立について既に*_r による説明を試みているが、同氏において*_r は声母の一成分として扱われている（pp. 284-289, 297-299 等）。
- (4) Pulleyblank（1962）は既にその可能性を指摘していたが、最終的な態度は保留した（華訳本 pp. 73-77 参照）。なおこの間の事情については鄭張（1998）・同（1999）及び潘（1990）を参照。
- (5) 原文は「喉牙音」とのみ記すが（p.9）、次注に引用する鄭張（1984）で明言されているように、唇音もここに加わるものと思われる。
- (6) 鄭張（1984）では以下のように分類されている。即ち、「中古三等有 A・B 二類。B 類指重紐三等・庚三・蒸的唇喉牙音字、這類字限於唇音和喉牙音、而且唇音不變輕唇。A 類字出現声母不限、並且除前元音和 -u 尾宵韻外、唇音都變輕唇。李先生 B 類作 i-、A 類作 j-。」（p.45）。その意味するところは必ずしも明確ではなく、また同（1999）の記述とも完全には一致しないが、ここでいう「B 類」はおそらく重紐 B 類韻及び庚三韻等の唇牙喉音字を指すのであろう（重紐 A 類韻は「A 類」の「前元音」韻類として処理されると思われる）。但しここでの分類はあくまで後の輕唇音化の有無を基準にしたものと考えられる。この点については下文を参照のこと。

なお本稿で用いる三等韻の分類・名称は平山（1966a）に従う。鄭張氏の「一般三等韻」はだいたいにおいて C 類韻に相当するが、同氏が重紐 B 類韻と同列に扱う蒸・幽韻唇牙喉音字については、蒸韻を平山（1966b）・同（1972）により、ま

た幽韻を松尾(1977)によって、A～Cのいずれかの韻類に分属せしめた。

- (7) 鄭張氏は上古声母を「前置成分+基本声母+後置成分」に分析し、*r,*lはこのうちの後置成分に相当する。なおこれらは同氏の用語では「冠音+声幹+諧音」となる。鄭張(1991)及び同(1999)参照。
- (8) これに対し、*lはその諧声系列に來母字または羊母字が存在する場合のみ設定される。この点については下文にて述べる。
- (9) 沈(1945)が整理の対象とするのは、その書名が示す如く『広韻』所収の諧声字であるから、そこには当然『説文』以後に現れた文字が含まれ、厳密には上古音研究の材料とはなり得ないものも含まれる。しかしここでは諧声字全体の最大公約数的な傾向を見るために、敢えてこの書物を用いて整理を行った。なお以下において各行左第一字目が声首、韻類は中古のそれである(平声の韻目を以て相配する上去入声を兼ねしめる。以下同)。なお中古にて同音(声調の違いのみを以て対立するものもいまこれに含める)の被諧声字が複数存在する場合は、『広韻』の小韻内配列で最も先頭に近い一字のみを示し、残りは「…」を以てこれを表す。
- (10) 曷声三等牙喉音声母字は以下の通り。
曷寒匣：曷祭B開溪、曷祭B開群、曷祭B開影、越元C開見、揭元C開群、謁元C開影、馱元C開曉、穉仙A開見、謁仙B開溪、謁仙B開群、獨凡C溪
- (11) 緣呼吠切もここに含む。
- (12) 『広韻』未収。『説文』に「齒、古文陸。」(四上7b)とするが、六声であるかは疑問の余地がある。
- (13) 二等唇牙喉音字が三等來母字の声首となるもの、例えば監衛見：檻塩AB來等はまさしく“新派”の*rを支持する例であり、これらを軽視するわけにはいかないが、いま問題を三等韻の介音に限り、しばらく論じない。
- (14) 「ところで、C類音節をB類よりもA類の側に付け、A類音節が含むと同じ音韻的特徴をC類音節も含んでいたと見なしても、事実の説明に困難を来さないと思う。このように見る場合、音声的には、奥舌主母音からの同化によって、A類とB類との中間的な、或は多少よりB類に近くさえある特徴をあらわしていた、と考えることが出来るからである。」(p.228)。「三根谷氏に沿って重紐の対立要素を声母に暫く求めるならば、C類声母はA類声母と同じく口蓋化要素/ \widehat{j} を含むものであったと仮定するのである。」(p.227)。ただここで平山氏は最終的な結論は保留されているようである。
- (15) ()を付したのもそれぞれの例数に含める。
- (16) 上表で重紐A類韻の現れ方が少ないのは、中古で重紐A類音節がB類に比して数が少ないこともその原因の一つであるかもしれない。

- (17) 鄭張氏は「-r-有抗輕唇化作用」(鄭張(1999) p.9)であるが故に、後にこれらの韻で輕唇音化が生じなかったとする。但しその「作用」がいかなる内容を持つのかは不明である。
- (18) 鄭張(1987) p.89 注13 参照。
- (19) この言い方は、少なくとも鄭張(1984)及び同(1987)についていえば不正確である。同氏は当該論文の中で、一部の羊母字が専ら牙喉音声母合口字と関係を持つことを指摘した上で、*fwlj-, *fwrj-が前舌主母音*i, *eの影響で中古羊母に変化したとする。しかしながら牙喉音系と通用関係を持つ諧声符がすべてこれによって説明されるわけではなく、問題は依然として残る。
- (20) 例えば大西(2000)が「但是喻四字的諧声範圍各有偏向、如董同穌先生指出、有一部分專門跟舌音相諧、又有一部分專門跟見系字相諧。比如從「余」得声的幾十個字無一讀舌根音的。(中略)如果「余」讀*la、為甚麼它不和帶*-l-的舌根音聲母相諧呢？鄭張先生的擬音無法解釋這種偏向。」(注釈(21)。p.79)と指摘するのを参照。
- (21) 河野氏のこの言葉は直接には「欧米の学者」を指したものであるが、これは鄭張氏ら“新派”にもそのまま当てはまるであろう。
- (22) 「/」の前は羊母声首を、後ろはその他の声母字の声首である。またカッコ内は二次以下の諧声符を表す。なお以下の分類は暫定的なものであって、ある声首が真にどのような声母組に亘って諧声字を形作るかは更に検討する必要がある。ただいまは羊母に関する諧声系統が牙喉音声母字との交替の有無によって二類に分かれることを示すために敢えてこれを掲げた。
- (23) 諧声字の振る舞いから見て、一応、咸声から分離して考える。
- (24) 定・澄・船母の濁音成分として、現代吳方言の濁音声母におけるような-nを想定するすることも可能であろう。ここに強い摩擦性が含まれていると見るのである。
- (25) 小倉(1981)は牙喉音起源の羊母字を*xj- (即ち本稿の*fj-)と再構するが、これは主として体系上の要請による。また龍(1998)は羊母の上古音価として複声母*zn-を再構するが、その第二成分nは、一方で牙喉音声母字との通用を説明するとともに、同時に「至於喻四与透・定二母的往還、則因透定並送氣音、清声母送氣成分本同曉母、与n相近；全濁送氣成分又因受濁流影響、變同於n、所以往往与喻四諧声、……」(p.358)とされるものであり、nを設定する理由としては本稿の趣旨に近いが、中古全濁声母を上古で有声有氣音と見る点、そして何よりも羊母の上古音価として唯一の*zn-をたてる点が異なる。なお注(19)の鄭張氏の再構音も参照。
- (26) 以上については平山(1994) p.140を参照。

- (27) 平山 (1991) に従い A 類と見なす。
- (28) 頼 (1957) を参照。仙・祭・宵・侵・塩韻に存在する重紐は、上古でそれぞれ同部に属し、支・脂・真韻のそれがそれぞれ異なる部に起源を有するのとは異なる。前者については、その起源を主母音以外の要素に求めざるを得ない。
- (29) 平山久雄先生はかつて東京大学文学部における講義 (1992 年度) の中でこの可能性についてふれられた。また平山 (1994) pp. 138-9 も参照。

引用文献

『説文解字注』、経韻楼原刊本 (藝文印書館、台北、1989 年、影印第 6 版、による)

- 有坂秀世 (1940) : 「先秦音の研究と拗音の要素の問題」、音声学協会会報 60/61、pp. 3-4 (『国語音韻史の研究 (増補新版)』、三省堂、東京、1973 年第 6 版、pp. 365-368、による)
- 董同龢 (1948) : 「上古音韻表稿」、中央研究院歴史語言研究所集刊 18、pp. 1-249 (台聯国風出版社、台北、1975 年、影印第 3 版、による)
- 平山久雄 (1966a) : 「敦煌毛詩音残卷反切の研究 (上)」、北海道大学文学部紀要 14 : 3、pp. 3-243。
- (1966b) : 「切韻における蒸職韻と之韻の音価」、東洋学報 49 : 1、pp. 42-68。
- (1967) : 「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」、北海道大学文学部紀要 15 : 2、pp. 240-184 [右]。
- (1972) : 「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」、東洋学報 55 : 2、pp. 64-94。
- (1991) : 「中古漢語における重紐韻介音の音価について」、東京大学東洋文化研究所紀要 114、pp. 1-41。
- (1994) : 「用声母腭化因素 *j 代替上古漢語の介音 *r」、*Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics* (第 26 回国際シナ・チベット語学会議論文集)、大阪、pp. 132-143。
- 河野六郎 (1966) : 「E. G. プーリーブランク著 古代中国語の子音組織」、東洋学報 48 : 4、pp. 96-101 (『河野六郎著作集』3、平凡社、東京、1980 年、pp. 389-396、による)
- 李方桂 (1971) : 「上古音研究」、清華学報新 1・2、pp. 1-61 (『上古音研究』、商務印書館、北京、1980、による)
- (1976) : 「幾個上古声母問題」、『總統蔣公逝世週年紀念論文集』、中央研究院、台北、pp. 1143-1150 (『上古音研究』、pp. 85-94 所収、による)
- 龍宇純 (1998) : 「上古音芻議」、中央研究院歴史語言研究所集刊 69 : 2、pp. 331-397。
- 陸志韋 (1947) : 「古音説略」、燕京学報專号 20 (『陸志韋語言学著作集 (一)』、中華書

局、北京、1985年、による)

- 松尾良樹 (1977) : 「幽韻小論」、均社論叢 5 : 1、pp. 1-15。
- 三根谷徹 (1953) : 「韻鏡の三・四等について」、言語研究 22/23、pp. 56-74 (『中古漢語と越南漢字音』、汲古書院、東京、1993年、pp. 45-62、による)
- 小倉肇 (1981) : 「上古漢語の音韻体系」、言語研究 79、pp. 33-69。
- 大西克也 (2000) : 「談談郭店楚簡『老子甲本』「澇」字的讀音和訓釈問題」、中国出土資料研究 4、pp. 74-80。
- 潘悟云 (1987) : 「諧声現象的重新解釈」、温州師院學報 (社会科学版) 1987:4、pp. 57-65。
- (1990) : 「中古漢語擦音的上古来源」、温州師院學報 (社会科学版) 1990:4、pp. 1-9。
- 頼惟勤 (1957) : 「中国における上古の部と中古の重紐」、国語学 28、pp. 1-9 (『頼惟勤著作集 I 中国音韻論集』、汲古書院、東京、1989年、pp. 191-204、による)
- 沈兼士 (1945) : 『広韻声系』 (中華書局、北京、1985年、重印本、による)
- 藤堂明保 (1957) : 『中国語音韻論』、江南書院、東京。
- 鄭張尚芳 (1984) : 「上古音構擬小議」、語言學論叢 14、商務印書館、北京、pp. 36-49。
- (1987) : 「上古韻母系統和四等、介音、声調的発源問題」、温州師院學報 (社会科学版) 1987 : 4、pp. 67-90。
- (1991) : 「上古声母系統及演變規律 (摘要)」、語言研究 (1991年増刊号)、p. 18。
- (1998) : 「上古音研究十年回顧与展望 (一)」、古漢語研究 1998:4、pp. 11-17。
- (1999) : 「上古音研究十年回顧与展望 (二)」、古漢語研究 1999:1、pp. 8-17。
- Baxter, W. H. (1992) : *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Karlgren, B. (1923) : *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-japanese.*, Paris.
- Pulleyblank, E. G. (1962) : The Consonantal System of Old Chinese, *Asia Major* Vol. IX Part 1-2, pp. 58-144, pp. 206-265. (華訳本、潘悟云等訳『上古漢語的輔音系統』、世界漢學論叢、中華書局、北京、1999)
- Schuessler, A. (1974) : R and L in Archaic Chinese, *Journal of Chinese Linguistics* Vol. 2-2, pp. 186-199.
- Yakhontov, S. E. (1960) : 「上古漢語的複輔音声母」、第 25 届国際東方学会議 (於モスクワ) 提出論文 (華訳本、唐作藩等編『漢語史論集』、北京大学出版社、1986年、pp. 42-52 所収、による。)

【付記】

本稿を成すにあたり、平山久雄先生にはご論文を提供いただくとともに、貴重なご意見

を賜った。また引用文献の収集には齋藤勝氏のご協力を得た。併せて心からお礼申し上げます。